



「物忘れなどの変化があっても安心して活動できる体制」 に関する調査から見たこと

2025年7月に、会員14名の方を対象に、「どのような体制があれば、物忘れなどの変化があっても、安心してセンターで活動できるか」についてを話し合う、グループインタビュー調査を行いました。

本紙では、改めて調査の趣旨と、主な結果についてご報告させていただきます。本結果が、今後のセンターの運営に活かされるとともに、会員の皆様が「自分や家族、仲間が、物忘れなどの変化が気になった時に、どのような体制があれば安心できるか」を、考えるきっかけになれば幸いです。

1 調査の趣旨

仙台市シルバー人材センターと認知症介護研究・研修仙台センターでは、会員の皆さんが、健やかに、長く、活躍できるための体制を考えるために、2024年度より共同研究事業を行っています。

2024年度に実施したアンケート調査では、ご自身の物忘れなどの認知機能の低下が気になっている方が一定数おり、その多くが仲間からのサポートがあることや、就業時間が短いことにより、就業を継続できていることが分かりました。

そこで今年度2025年度の調査では、「どのような体制があれば、物忘れなどの変化があっても、安心して活動できるか」を明らかにするために、まずは就業コーディネーター、職群班長や地域班長の声を聴くことにしました。

調査の方法

<対象者>

就業コーディネーター6名、職群班長4名、地域班長4名

<方法>

7名ずつ2組のグループインタビューで、「自分や仲間にももの忘れなどの変化があっても、安心して活動を続けるためには、どのような体制が必要か」などについて意見を出し合いました。

<配慮事項>

調査で得られた情報は、個人が特定されないように匿名化して分析しました。



2 調査の主な結果

(1) 仲間の変化に気づき、関係性を大切にお互いに助け合っている

調査に参加した就業コーディネーターや班長の多くが、仲間の物忘れなどの変化に気づく経験を語っていました。その際には、関係性に配慮しながら、次のような考え方を大切にして対応していることが分かりました。

カテゴリ	代表的な語りの内容(抜粋)
対話・関係性を重視	「(年を取ったら)当たり前のこととして受け止めている」 「言葉を選んで、本人に話を聞いてみる」 など
働き方の調整	「作業人数が多い仕事を紹介できるようにしている」「できる仕事を見極めること、開拓することがコーディネーターの役割」 など
就業以外での活躍	「地域班の活動が居場所になったらしい」 「シルバーは就業だけではないと思う」 など

(2) 今後は、活動の選択肢を広げることや、認知症への理解普及が必要

一方で、負担の少ない仕事の選択肢が限られていることや、物忘れや体力に不安のある会員の就業について発注者の理解が得られないことから、就業コーディネーターが悩む場面もあることが語られました。

また、同じ会員の立場としてどこまで踏み込んでよいか悩むことや、健康について相談できる場が少ないことも課題として挙げられました。これらの課題を解決するためには、認知症や認知機能の変化への理解を深めていくことが基盤になるとの意見が挙げられました。

カテゴリ	代表的な語りの内容(抜粋)
相談体制の不足	「物忘れのことは相談しづらい」「センターには相談しづらい」 「匿名で相談できるといい」「少しの違和感でも相談できるといい」 など
健康状態把握の難しさ	「加齢によるものか分からない」「本人に自覚がないことがある」 「入会以降の健康状態を把握する機会がない」 など
会員間での関与の限界	「家族に相談するか迷う」「同じ会員の立場でどこまで踏み込むべきか悩む」 「本人から他言しないと言われると対応できない」 など
安全確保の難しさ	「いつまでも続けてと言いつらい」「複数人で働ける仕事の開拓が必要」 「通勤手段がないと仕事の継続が難しいこともある」 など
役割の模索	「同じ仲間の立場だからできることがある」「仲間が励み」 「物知りな会員が相談相手になるのもいいかもしれない」 など
認知症の理解推進の必要性	「認知症を受け止めることが大切」「自分にもあり得る変化である」 「まとめ役は知識が必要」「認知症について知りたい」 など

来年度も、引き続き、こうしたテーマに関する情報提供や、皆さんの状況についての調査を予定しています。ぜひご協力をお願いいたします。

